独立行政法人
国立病院機構

相模原病院からの

http://www.hosp.go.jp/~sagami/

耳よりみみいいメール

国立病院機構 相模原病院　広報誌
平成25年7月5日号
発　行：国立病院機構 相模原病院
発行責任者：秋山一男
住　所：相模原市南区桜台18-1
電　話：042-742-8311（代表）
ＦＡＸ：042-742-5314

第60号

写真：左から金田副院長、瀧川放射線科医長、秋山院長、安達統括診療部長
（新しく導入した最新ＣＴの前で撮影）

第60号　目　次

「副院長就任にあたって」…… 2
「統括診療部長就任にあたって－医は"人"術－」‥ 3
「相模原病院の職員となって考えること」‥ 4
「相模原病院に就職して　その1」…… 5
「相模原病院に就職して　その2」…… 5
「放射線科　64列dual energy CTの導入」‥ 6
「ＮＢＣテロ対応訓練に参加しました」‥‥‥ 7
連載 近隣協力医療施設の紹介コーナー
「相武台ニーレンクリニック」…… 8
2013年相模原病院納涼祭のお知らせ ‥‥ 8

SAGAMIHARA
NATIONAL
HOSPITAL

私たちは患者の皆さまの人権を尊重し、十分な説明と同意に基づき親切で心のこもった医療を提供します。

「副院長就任にあたって」

副院長
金田　悟郎

このたび、平成25年4月1日から渡部幸夫前副院長の後任として副院長に就任しました金田悟郎と申します。と言いましても、私は平成3年4月に当院（当時は国立相模原病院でしたが）に赴任し、この4月から23年目の勤務となります。ですから、皆様の中には私のことを知っていらっしゃる方も少なくないと思います。私はもともと外科医ですので（もちろん今でもそうなのですが・・・）今まで多くの手術を執刀させていただき、また多くの緊急患者さんの治療にもかかわってまいりました。今でも赴任当時に手術をさせていただいた患者さんが外来に来られています。このときよくかわす言葉が、“あっという間でしたね”という言葉です。なにか“一気に駆け抜けてきた”というのがこの22年間の感想です。とはいうものの、この22年間に世の中も変化しましたが、相模原病院も大きく様変わりをしてきています。

平成16年4月、当院はそれまでの国立病院から独立行政法人化となりました。これは当院に限らず全国の国立病院すべてが一度になったわけです。ただ、実際病院の中身や機能が変わったわけでなく、皆様にわかる部分としては、病院の名称が“独立行政法人　国立病院機構　相模原病院”とやや長い名前に変わったにすぎません。私自身もタクシーに乗るときは“国立病院”ないし“相模原病院にお願いします”と言っているのが現状です。次の当院のイベントとしては、平成20年8月に、40年以上経過していた病棟を建て替え、移転をしたことです。以前は夜間、冷暖房が切れてしまい入院患者さんには大変ご迷惑をおかけしました。現在は24時間空調管理ができるようになり、皆様に安心して入院生活を送っていただける環境が整っています。最も新しいイベントとしては、皆様もすでにご存じとは思いますが、病院医療情報システム（オーダーリングシステム）というものを平成21年6月に導入しました。これは一般に“電子カルテ”と呼ばれるもので、最近は外来で医師が診察をする際にコンピューターモニターを見ながらキーボードで何やらカチャカチャとやっているのを見たことがあると思います。これにより、具体的には皆様の診療内容、処方内容、検査結果、レントゲンやCTといった放射線画像から、超音波、内視鏡検査といったすべての医療情報が電子化され保存することができるようになりました。ただこれらのITシステムは電気がないと動いてくれません。実際、東日本大震災の際、当院も4回ほど計画停電を余儀なくされ、この経験から平成23年7月に太陽光発電（ソーラーシステム）や、院内にLEDを配備、さらに電子カルテが使用可能な自家発電・配線の整備も行いました。このため現在は計画停電でもすべてではありませんがかなりの診療が可能な状態となっています。

当院病棟屋上に設置されているソーラーパネル

このように相模原病院も常にバージョンアップを繰り返してきています。ハードだけでなく職員も一生懸命バージョンアップして皆様にいい医療を提供できるように努力してまいりますので今後ともよろしくお願いいたします。

「統括診療部長就任にあたって ー医は“人”術ー」

統括診療部長
安達　献

はじめに

私は昭和33年9月、北海道函館市から車で30分ほどの七飯（ななえ）町にある国立療養所（現在は民間病院へ委譲されたそうです。）の官舎で、男ばかりの6人兄弟の長男として産声をあげました。北海道のほぼ中央に位置し母の故郷でもある人口13万人の帯広市に、父があだち内科・小児科医院を開業したのが8歳の時でした。昭和41年当時帯広には入院可能な病院が少なく、父は定床18床のベッドをフル稼働させつつ、気管支造影検査や胃内視鏡検査等を行いながら1日100人以上の外来診療、昼休みには往診、夜間は当直業務並びに外来救急対応とプライベートの時間をほぼ犠牲にして、母の助けを借りながら孤軍奮闘していました。住居棟のドアひとつ開けると大変厳しい人なのに、貧しい人達や困っている人にはとりわけ優しく接している父の背中を見るにつけ「医は仁術である」を実感し、医師への道を志したわけです。医師になって30年、平成3年に消化器内科医員として当院に赴任して23年目になりますが、この間に医療自体が専門化、高度化するとともに、医療をとりまく環境は激変しました。一人の医師が診断・治療からお看取りまですべてを担う時代から、各々が仁の心を共有しつつ、医に携わるあらゆる職種の人達との連携、より高いレベルでの相互協力が不可欠の時代になったと強く感じる今日此の頃です。平成16年4月に当院は独立行政法人化しました。すなわち、それまでの国の予算で運営されるのではなく、独立採算による病院運営となったわけです。加えて救急医療に関わる医師不足の状況がからみ、今後永きに渡って当院が存続するために、実際の診療面においては様々な変革が求められました。

病院外：診療所や他病院の医師との人的連携

一人の患者さんを特定の医師が診続ける時代は一部を除いて終わりを告げ、地域の中心医療施設かつ急性期病院としての役割を果たすため、近隣の医療機関からの救急患者さんを含めた重症患者さんや、診断や治療困難な患者さんの紹介を積極的に受け、一方、入院治療が終了された患者さんや診断・治療方針が確定した外来患者さんについては、一般医家の先生に紹介（これを逆紹介といいます。）させていただいています。逆紹介した患者さんの病状の悪化した場合や、かかりつけ医の施設で対応困難な場合には、当院が診療支援するいわゆる病診連携という体制が求められており、当院も推進しています。平成23年10月より地域医療支援病院となり、現在215施設281名の先生方に当院の協力病院並びに協力医師として登録いただいております。

病院内の人的連携

現在、当院では患者さんに1日でも早く治療を終え退院いただくために以下の職種がサポートしてくれています。
①入退院管理室や看護部を中心としたベッド調整、メディカルソーシャルワーカーが加わった医療支援・退院支援、早期リハビリテーションに関わる理学療法士の活動。②薬剤師による患者さんの他院処方薬を含めた服用薬の入院時や入院前チェック。③外来での手術前、あるいは入院前検査推進のための臨床検査や放射線科スタッフの協力。④管理栄養士が中心となりあらゆる職種が参加する栄養サポートチームや看護師が中心的役割を果たしている医療安全部門、感染対策部門、褥瘡対策部門、呼吸ケア、緩和ケア部門の活動。⑤手術部や放射線部、内視鏡室、化学療法部門において医師をサポートする専門的技量や知識を有する看護師や臨床工学技師の存在。⑥検査機器の共同利用のための予約調整や入院時の説明、書類の作成補助等に携わる医師事務補助者による医師のサポート。⑦医事や経営企画の立案や優秀な人材確保を司る事務部門、コンピュータ機器、情報システムを管理する医療情報部門、営繕活動を行うスタッフの活躍。以上のような多職種の積極的なバックアップがあったからこそ、独法化をはさんだ10年以上に渡って当院が黒字経営を続けてこれたと深く感謝しております。

おわりに

当院は今年で創立68年目を迎えておりますが、平成20年新病棟を開棟したとはいえ病院の表玄関である外来管理棟は昭和40年の竣工で50年近く経っております。医は“人”術であると、あらゆる職種の職員間の連携・協力を更に密にしつつ、近隣の先生方や、患者さん、地域の方々に更なるご支持を得られるよう、そして1日も早い新外来棟着工へ向けて職員一丸となって邁進する所存ですので、国立病院機構相模原病院をご利用いただく各位のご支援、ご協力を賜りたく宜しくお願い申し上げます。

「相模原病院の職員となって考えること」

事務部長
大島　宏一

4月1日付で相模原病院に参りました大島と申します。前任地は、東京都小平市にあります、独立行政法人国立精神神経医療研究センターです。この施設は、精神・神経疾患等に関します医療や調査・研究、研修等を行う高度専門医療研究センターです。研究所を中心とする施設であり、相模原病院とはその性格が異なる施設ですが、医療と研究を行うという基本的なあり方は何ら変わるものではありませんので、前任地で培ってきた経験を微力ながら相模原病院のために活かすことが出来ればと考えています。

さて、平成16年4月に、国立病院・療養所が独立行政法人国立病院機構として発足して、もう早9年が経過しています。平成22年度からの第二期の中期計画は、本年度が最終年度であり、10年という一つの節目を迎えるに至っています。第一期の中期計画の業務実績に対する評価は、全体として、医療・経営の両面において中期目標の水準に対して、大きな成果を上げているとの評価を得ています。第二期中期計画おいても、各年度毎に、高い評価を得ているところです。今年度、これらの成果を踏まえて、第三期の中期計画の策定が進められると思いますが、平成24年1月20日の閣議決定「独立行政法人の制度及び組織の見直しの基本方針」に基づき、国立病院機構として目指していました独立行政法人ではない固有の根拠法に基づく法人の設立につきましては、国の方針の変更により凍結となり、引き続き独立行政法人の在り方について検討することとなっています。今後この検討結果に基づいて、国立病院機構の在り方が決まるものと思います。現場である病院としては、これらの動向を注視しつつ、安定した運営を続けていくことになると考えます。

このような、大きな国立病院機構としての枠組みの中で、実際に医療を提供していく相模原病院としては、安定した経営をしっかり進めていくことは当然ですが、何にも増して、地域医療を担う病院としての役割が重要だと考えます。相模原病院にて受診していただいている患者さんの多くが、地元の相模原市からの方々で占められていますので、相模原病院は、地域の方々との結びつきの強い、その結びつきを中心とした病院であり、そのためにも、病病連携・病診連携を強化しながら、地域医療支援病院としての役割を確実に果たして行く必要があると考えます。

図：平成24年度に当院に紹介された患者さんの住所の分布

そこに加えて、これも最終的には地域医療につながるものですが、災害時に重症・重篤な傷病者を受入れるなどの医療救護活動において中心的な役割を担う病院である災害医療拠点病院としての県の指定を受けるべく、その要件の整備などの努力を続けています。

写真：テロ対策合同訓練にて傷病者のトリアージを行う当院のスタッフ（黄色のビブスを着用）

このような、地域医療支援病院や災害医療拠点病院としての機能を十分発揮するためにも、また病院としてのサービスの向上のためにも、懸案となっている新たな外来棟の建設は欠かせないものです。現在、病院内で検討が続けられていますが、地域医療の強化につながる、地域の方々に喜ばれる機能を持った病院となるよう、相模原病院として最大限の努力をする必要があると考えます。

今後とも、「私たちは患者の皆様の人権を尊重し、十分な説明と同意に基づき親切で心のこもった医療を提供します。」との相模原病院の理念のもと、地域医療に貢献できる病院作りに職員一丸となって努力して参りますので、よろしくお願いいたします。

「相模原病院に就職して」その１

5階北病棟　看護師
杉浦　美月

私は、この春から相模原病院で看護師として働いています。親戚に看護師がおり、小学生の頃から病院や看護の話を聞いていたため、いつの間にか看護師を目指していました。少しでも早く看護師に近づきたいと思い、看護科のある高校を経て、看護学校へ進学しました。

生まれも育ちも相模原市なので、将来は地元で働くことを希望していました。以前、母が相模原病院に入院した際に、不安でいっぱいの私たち家族に対して、病棟の看護師の方々がやさしく声を掛け、温かく接して下さいました。その時に、私もこんな看護師になりたいと感じ、相模原病院で働くことに決めました。

入職して、仕事を始めてからは、看護師として患者さんと接することの楽しさを感じる一方、時には命にも関わる仕事をしているという責任の重さも感じています。先輩から教えていただく看護は、学生時代には深く学べなかった現場での医療技術も多く、学ぶことはまだまだたくさんあるのだと認識しました。5北病棟の先輩方は優しく明るく元気良く、和気あいあいとした雰囲気の中で、私自身、毎日楽しく過ごしています。

また、病棟の環境も素晴らしく、特に私の好きな場所は大山の見えるデイルームです。窓から見える夕焼けは一日の疲れを癒してくれます。

今年、私の病棟には4名の新卒看護師が配属されました。同期として支え合い、お互いを高め合いながら、先輩方からアドバイスをいただいて知識や技術を身に付け、患者さんやそのご家族に安全で、安心な看護を提供することが出来るよう、努力していきたいと思います。

「相模原病院に就職して」その2

薬剤科　薬剤師
丸山　浩平

私は四月から相模原病院で薬剤師として働いています。生まれも育ちも相模原市で、大学時代から将来は病院薬剤師として働きたいと考えていたので、相模原市の医療の中心を担っている相模原病院で働けることを嬉しく思っています。

現在、私は調剤室で外来患者さんや入院されている患者さんのお薬を作る業務を中心に行っています。先輩薬剤師の方々の熱心な指導のおかげもあり、日々仕事の幅を広げていくことができています。それと共に、薬剤師として働く責任の重大さも感じています。薬剤師はお薬を作った後に自分の名前が入った押印をしています。一つのミスが大きな事故につながることもあり、薬剤師は一つ一つの押印に責任を負っているのです。

近年、病棟における薬剤師の活動がチーム医療の一環として更に期待されるようになってきています。薬剤師は先述したお薬を作る業務だけでなく、お薬の飲みあわせを確認したり、病室において患者さんにお薬に関係する全般の話をするなどの業務を行っています。また、他の医療者とそれぞれの専門性を生かして連携し、患者さんにとって最適な治療を決められるようにしています。

私は薬剤師として患者さんの疑問や不安を解消し、気持ちも楽にさせてあげられるようになりたいと考えています。また、先輩方のように実習生や後輩の指導にも力を入れていきたいです。

医療業界は常に進歩し続けており、薬剤師も他の医療者と共に、生涯にわたり自己研鑽が必要になってきています。思いがけないところにも学ぶことがあると思うので、視野を広く持って、一日一日を大切に過ごしていきたいです。

「放射線科　64列dual energy CTの導入」

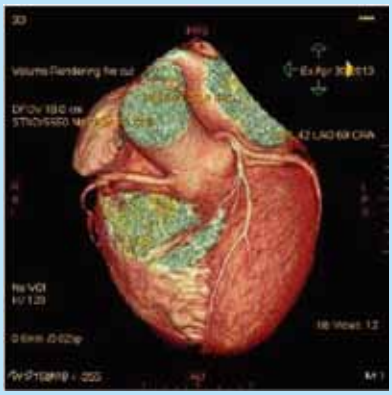
放射線科医長
瀧川　政和

平成25年4月より64列dual energy CTを導入しました。CTとは、コンピューター断層撮影法（Computed Tomography）の略です。身体にエックス線を照射し、通過したエックス線量の差を集め、コンピューターで処理することによって身体の内部を画像化する検査です。エックス線は、肺のように空気のたくさんあるところは通過しやすく、骨は通過しにくいという性質を有しています。そのため、身体の組織や臓器によってエックス線の通過しやすさ（透過性）は異なり、この差を利用して画像を作りだすことができるのです。

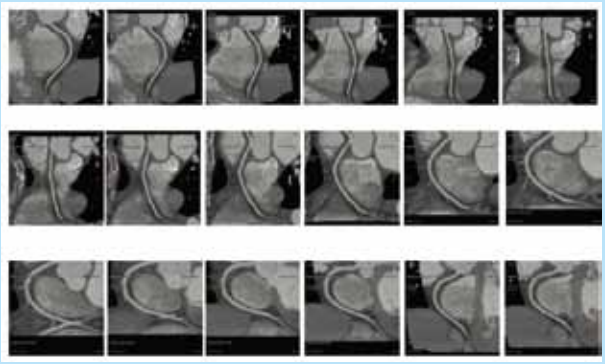
CT検査によって病変が描出されるのは、エックス線の透過性が病変と正常部位とで異なるからです。当院のCTはX線の検出する部位（検出器）が弧状に４列に並び、１種類のX線しか出せないCTでしたが、今回導入したCTではこの検出器が64列並び、エネルギーを変えた２種類のX線を出すことができ、一度に広範囲の撮影ができるようになりました。そのため、撮影時間が短くなり、撮影のために息を止めていただく時間も短くなりました。また、これまでよりも格段に早く撮影ができるようになったので、従来は動いていて難しいとされた心臓の動脈（冠動脈）や大腸の詳しい撮影もできるようになりました。今回は、その心臓（冠動脈）CTと大腸CTについてご紹介します。

①心臓（冠動脈）CT検査

心電図を取りながら心臓の撮影を行う造影CT検査で、心臓に酸素や栄養を送る冠動脈を調べます。造影剤で冠動脈を映すので、造影剤を使用できないと検査はできません。心臓は常に拍動している臓器で、脈拍が低い方が、きれいな画像を撮ることができます。そのため、当院では検査当日の脈拍が高いときには、検査約1時間前に来院していただき、場合によっては心拍数を抑えるお薬を服用してから撮影を行います。カテーテル検査での冠動脈撮影では入院が必要ですが、心臓（冠動脈）CTは外来でも施行可能です。



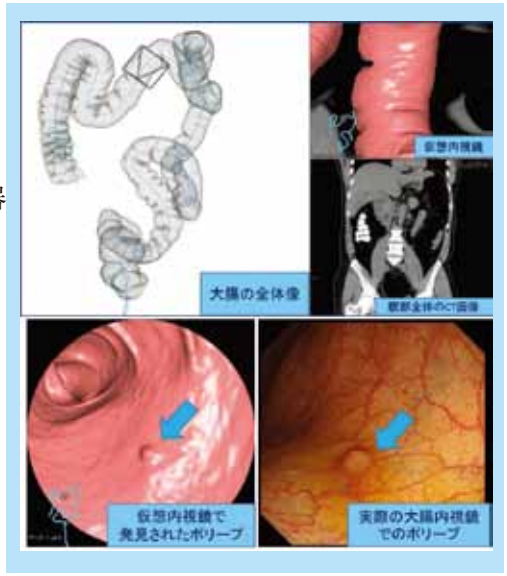
心臓の全体像



冠動脈の断面像

②大腸CT

バーチャル大腸内視鏡（仮想大腸内視鏡）、CTコロノグラフィとも呼ばれる検査で、大腸に炭酸ガスを注入し、大腸を拡張させた後に最新の CT 装置を用いて撮影します。この撮影で大腸の3次元画像を得ることができるようになりました。炭酸ガスは体に吸収されますので、内視鏡検査と比較して、お腹のはりなどの苦痛が少なく検査することが可能です。大腸の中をきれいにしないとできない検査ですので、検査前には専用の検査食と下剤を服用していただいてからの検査になります。



他にも放射線科では、当院で保有する大型検査機器（SPECT・CT装置、CT装置、MRI装置、放射線治療装置など）の共同利用を通じて、地域の先生方への貢献を目的とした病診連携を推進しています。画像検査目的のご依頼ですと、従来は検査予約のための受診、検査、結果を聞くための受診と、患者さまには3回当院に来院していただく必要がありました。しかし現在は、地域の先生方（かかりつけ医）と連携を深め、直接かかりつけ医の先生にご依頼時に検査日のご予約をしていただき、検査日に検査後約1時間で画像結果と画像診断レポートを患者さまにお渡しする取り組みを進めています。そうすることで、患者さまは当院への来院を１度で済ませることができ、さらに当院の先生方とかかりつけ医の先生方が双方で画像の検査結果を共有することができると大変好評をいただいております。現在近隣の約50施設以上の先生方からご依頼をいただいており、昨年度の共同利用実績は1ヶ月平均で250件ほどでした。

今回ご紹介した心臓などの新たな検査も、順次ご案内して行く予定です。これからも来院患者の皆様が安心して、放射線の画像検査や治療を受けられるよう、放射線科のスタッフ一同、努力していきたいと思いますのでよろしくお願いします。

写真：相模原病院の放射線科スタッフ

NBC（核、生物、化学物質）テロ対策訓練」に参加しました

管理課

6月に横浜市で開催される「第5回アフリカ開発会議」を前に、NBC（核、生物、化学物質）によるテロへの対策訓練が、5月7日相模原市中央区の淵野辺公園にて行われました。主な参加機関は相模原市消防局、相模原警察署、北里大学病院、そして相模原病院で、約170名が参加しました。

訓練は公園内の建物で有毒物質をまかれ、多くの傷病者が発生したとの想定で始まり、化学防護服に身を包んだ消防隊や警察のテロ対応専門部隊が、有毒物質を吸い込んで倒れている傷病者を救護所に運び、当院の医師、医療スタッフは傷病者の症状などを考えて治療の優先度を判断するトリアージを行いました。

当院は現在、相模原市における災害医療の拠点病院を目指しているところですが、このような規模の災害訓練への参加は初めてでした。参加スタッフからは「初めてのことばかりでどう動けばよいかわからなかった。」「トリアージ作業にとまどいがあった。」といった反省点がいくつか挙がり、本当に災害が起きたときに、こうした反省を活かせるよう、このような訓練を重ねていく必要があると実感しておりました。

今後、相模原病院が地域の災害医療の拠点病院として貢献が出来るよう、職員一同励んでいければと思います。

連載

近隣協力医療施設の紹介コーナー

座間市相武台「相武台ニーレンクリニック」

院長
小林　直之 先生

相武台ニーレンクリニックは、ドイツ語の「腎臓」を意味する「ニーレン」を院名とし、2000年10月に小田急線相武台前に開院致しました。

当院では、内科・循環器内科・人工透析内科を診療科目とし、特に人工透析部ではオンラインHDF（血液透析ろ過法）での透析も行っています。循環器・腎臓・糖尿病・高脂血症においては相模原病院や近隣病院の先生方にもお力添えをいただき専門外来を設けています。

近年、慢性腎臓病（CKD）では、心筋梗塞・心不全・脳卒中が増えております。また生活習慣病やメタボリックシンドロームがCKDの発症や進展に関与していると言われています。早めの検査で予防・対策をたてることが重要です。

CT・MRIの撮影依頼をいつも速やかに受けてくださる放射線科の先生方をはじめ相模原病院との病診連携には大変心強く感謝致しております。この場をお借りし御礼申し上げます。

当院では、地域医療に貢献すべく職員一同診療に従事しております。今後とも宜しくお願い申し上げます。

【相武台ニーレンクリニック】

診 療 科：内科・循環器内科・人工透析内科

診療時間	月	火	水	木	金	土	日祝
9:30～12:30	○	○	○	○ 予約制	○	○	－
～16:30	－	○ 予約制	－	○ 予約制	－	－	－
17:00～19:00	○	－	○	－	○	－	－

休診日：日曜・祝日
電　話：046-298-2552　FAX：046-298-2553
ホームページ：http://www.nieren.jp/
住　所：神奈川県座間市相武台1-4505　中央企業ビル1F

～2013年相模原病院納涼祭のお知らせ～

相模原病院の夏の恒例行事となっております納涼祭を、本年も**7月19日(金)**に開催させていただくこととなりました。会場は昨年と同様に病院敷地内の旧病棟跡地にて、時間は**17：15開場、18：00開演**を予定しております（雨天決行）。

この納涼祭は“縁日を病院で”をコンセプトに、職員のみならず患者様や近隣住民の皆様、お子様にも楽しんでいただけるよう、当日は金魚すくい、ヨーヨーすくい、くじ引きといったゲームや、各種ドリンクそして焼きそばをはじめとするフードコーナー、そして職員によるアトラクションやバンド生演奏等も予定しており、21：00の終演前には打ち上げ花火が夜空を彩り、会場は一気にクライマックスを迎えます。病院職員一同皆様のご来場をお待ちしておりますので、是非ふるってご参加下さい。なお当日は駐車場スペースの制限がございますので、お車でのご来場はお控えいただきますようお願いいたします。

納涼祭実行委員一同

編集委員　藤原　保　柳瀬　則人
高橋　厚美